

「おろしゃ」への遠き道

加藤史朗

プーチン政権下におけるロシアの国力回復は、めざましい。ロシア進出に慎重であったトヨタもペテルブルクに工場を造ったし、日産や三菱も後に続こうとしている。また出版界では、「カラキョー」（亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』のこと）が爆発的に売れて、話題となっている。しかし、ロシアに対する関心は、ペレストロイカ期に比べると、相変わらず低迷したままである。大学におけるロシア関連講座の閉鎖や担当教員の失業といった話まで聞こえてくる。こうした中で、ロシアについて学ぶ必要を説くことは、ロシア語やロシア研究を講ずるものの任務ではあるが、非常に困難だ。

20 数年来、私は早稲田大学で非常勤講師として社会科教育法（地歴科教育法）を担当している。毎年、手始めに学生に要求する作業は、自分たちが受けてきた歴史教育と歴史意識の形成過程を振り返ってみて、それを文章化することである。自分の体験を対象化し、乗り越える目標にすることが狙いであるが、模擬授業をやらせてみると、過去を振り返り、批判の対象としてきた筈の授業形態をそのまま踏襲した授業しか出来ない場合がほとんどである。でもそれに気づくと気づかぬとは大違いだと思っている。ロシアについての自分の講義や研究

も同じような状況にあるのではなかろうか。そこで学生たちに要求するように、自分のロシアに関する意識の形成過程を振り返ってみることにする。

フンのロシア

フンと言ってもアッチラ率いるフン族のことではない。kaka（糞）のこと。幼時の記憶の中でロシアはそれと結びついているのだ。三番目の兄（7歳年長）の友達が我が家に遊びに来ては、幼児の私を次のようにからかった。「シロウ、ロシヤ、野蛮国、クロパトキン、ケッチンゴ、李鴻章のハゲアタマ」と。日露戦争後の「スズメ、メジロ、ロシヤ、ヤバンコク、クロパトキン、キンタマ、マカロフ、フンドシ…」というロシアを揶揄する尻取り歌の残滓が第二次大戦後まで生き残っていたのである。ある時ついに堪忍袋の緒を切らした私は、家の外まで兄の友達を追いかけた。すると彼は、あろうことか、道端の馬糞を新聞紙に丸めて、私に投げつけたのだ。私の首筋に半乾きの馬糞が命中。私は悔しく泣き崩れ、その日は晩飯も喉を通らなかったほどであった。「シロウ、ロシヤ」という屈辱感に満ちた響きは生暖かい馬糞の感触とともに、私の心にトラウマとして刻み込まれた。後年早稲田の畏友井桁貞義氏や伊東一郎氏の

口から「バフチン」という名前を聞いたたびに、何か言い知れない嫌な感じを受けたが、バフンのトラウマのためかもしれない。

「ロシア、野蛮国」という言葉の意味が歴史的事実をもつようになったのは、1956年、私が小学校4年の時に公開された嵐寛寿郎主演「明治天皇と日露大戦争」によって。この映画は空前の大ヒットとなり、私も小学校の課外授業で映画館まで見に行った。日本が勝つ戦争なのだ。興奮の大拍手の中で映画を見た記憶がある。力道山の活躍を見るのと同じ雰囲気であった。

しかし、その一方で当時の社会主義ソ連は、私のトラウマとは裏腹に燦燦たる輝きを放っていた。小学校1年の時、スターリン死去。部屋にスターリンの肖像画を掲げていた二番目の兄は泣きそうだった。しかしその後のスプートニク打ち上げ、ソ連からの小児麻痺ワクチン援助、砕氷船オビ号による南極の氷に閉じこめられた日本の砕氷船「宗谷」の救出、ガガーリンによる初の宇宙飛行など、次兄を上機嫌にさせるニュースが続いた。家の茶の間では、父と大学生の次兄がソ連や社会主義をめぐる論争することがしばしばあった。次兄が優勢に見えた。父は毎年、元旦には子どもたちを連れて氏神詣でに出かける。長兄と私と弟だけが父に従った。次兄は、日の出を見に行くと言っていつも大晦日の夜から家を留守にした。しかし次兄がとっていた『前衛』や『世界』は、いつも父が読んでいたような印象が残っている。1960年の安保問題は国論を二分したと言われるが、中学生の私にもその実感は残っている。中学校で

も先生たちを保守と革新に分けることが簡単に出来た。だが英語をならった星川運八郎先生だけは、その分類には当てはまらない気がした。シベリア抑留を経験された方で、授業の合間に収容所の悲惨な生活を語り聞かせてくれた。とつとつとした話し振りだったが、実体験の重さは、中学生にも感じられた。特に印象に残っているのが、鍾乳石のように、凍って盛り上がる大便の始末の話。ここでもロシアはフンと結びついていて。歌声運動の盛り上がりは、高校時代にも続いていた。生徒会執行部の一員であった私は、学園祭やサークル合宿で使うための歌集を作り、多くのロシア民謡をそこに収録した。国際学連の歌やワルシヤワ労働歌も入っている。しかしそのようなソ連と社会主義優位のトレンドの中にあっても、ロシアとソ連に対する異臭感を拭うことは出来なかった。

どん底

高校2年生の時、早稲田の露文科出身の宮崎宏一先生が現代国語の先生として赴任してこられた。和田あき子さんや水野忠夫氏と同期の方である。この先生が授業で最初に語ったのがゴーリキーの『どん底』であった。授業中に「明けても暮れても牢屋は暗い。いつでも鬼めがエー窓から覗く…」と芝居の主題歌まで披露するほどであった。住井すえの『橋のない川』についての話しにも熱がこもっていた。当時私は生徒会執行部で会計を務めていたが、会長・副会長・書記長はみな民主青年同盟に加入していた。先生は彼らのヒーローであった。1963年部分核実験禁止条約が締結され、日本共産党はこれに反対した。生徒会内部でも大議論

となった。この条約を支持した私は、執行委員会で完全に孤立した。果てしない議論を終えて夜遅く家路についた時、道すがら憔悴している私に書記長が慰めるように声をかけてくれた。「シロちゃんよお、中央は俺達より高い見地で判断を下しているんだから俺は中央を信頼するな…でもシロちゃんとは思想が違うことはわかったよ。一致できる点で一致していこうな…」と。私は釈然としないまま力なく肯くしかなかった。この問題を契機にモスクワのルムンバ民族友好大学への進学を希望していた会長は、進路を東大へと変更した。ところで私は生徒会の他に、社会科学研究会・文芸部・ESSに籍をおいていた。文芸部では新崎智（現評論家の呉智英）が部長を務め、一緒にカミュやサルトルを読んだが、ピンと来なかった。しかし彼との交友の中でドストエフスキーを知った。当時小沼文彦訳の全集が刊行され始めたばかりであり、彼は自慢そうにそれを見せてくれた。そこまで文学青年ではなかった私は、米川訳の岩波文庫で『罪と罰』、『カラマーゾフの兄弟』、『悪霊』などを読んだ。今からは想像も出来ないことかも知れないが、当時の若者たちの間では世界中が社会主義化するのは必至と思われていた。「諸君これから立身出世するにはマルクス主義者にならなければならない」という先生もいた。またマルクス・エンゲルス全集が金満家の応接室を飾る家財道具として売れるという嘘のような話さえ聞こえてきた。社会主義になったときの保険としてである。ドストエフスキーの作品は、人間て奴はそんなに単純にはいかないぞと教えてくれた。さらにソ連の

外皮の奥にロシアのナロードと大地があるという漠然としたイメージも与えてくれた。

社会主義や共産主義の魅力と違和感の相克は私を仏教へと誘った。私が通っていた名古屋の私立東海学園は、もともと浄土宗立の学園であった。高校2年まで高校校長を務めたのが、戦前新興仏教青年同盟の書記長を務め、治安維持法に触れ入獄体験もあった林靈法先生である。民青の諸君や新崎智から頗る馬鹿にされたが、この先生の『現代思想と仏教の立場』や『わが復活の曙光』という著述からは多大な影響を受けた。毎月定例の日曜宗教講座にも通い、先生の発行されていた新聞『大地』の熱心な読者であった。先生との出会いを通して仏教社会主義という展望が開けたように思えたのである。

反スターリン主義のどん底

1965年に早稲田大学政経学部に入學した。その入試面接の時、面接担当の北河先生（英語）に「早稲田で何をやりたいか」と聞かれ、迷わず「仏教社会主義思想の研究です」と答え、「階級闘争のマルクス主義や一神教のキリスト教では真の平和共存は不可能です。自他共栄の仏教でこそ初めて社会主義は実現できるのです」と林先生の言葉を借用した。北河先生は「それは面白い。しっかりやりたまえ」と答えて下さった。入学後、迷わず仏教青年会に入り、ロシア語を第二外国語に選んだ。中国語選択者と合同の1年T組であった。中国語の新島淳良先生がクラス担任で、ロシア語担当は佐藤勇先生（現在売れっ子デザイナーの佐藤可

士和氏は、先生の孫である。幼児期の姿を良く覚えている）であった。

折りから政治の季節は春から夏に移ろうとしていた。クラスタイムには、革マル、中核、社青同解放派などの活動家が入れ替わり立ち代わりしてオルグにやってきた。一番説得力のあったのが、革マルの蓮見清一氏（現宝島社社長）だと思われた。しばらく彼の主宰する学習会に参加した。レーニンの『国家と革命』がテキストであった。階級対立の非和解性の産物としての国家、それが共産革命により、やがて死滅するのだというテーゼは、非常に魅力的であり、ソ連はおろか日本や中国の共産党を批判する共産主義者がいるということそのものが晩生の私には新鮮であった。ハンガリー動乱のことは、母校の社研では話題にもならなかった。反乱は共産主義者の専売特許ではなかったのだ。「基底体制還元主義だ」と他党派を批判する彼の言葉が、人間はそんなに単純じゃないぞというドストエフスキー体験と絡み、自己否定を通して革命的主体を形成するという彼の主張が、仏道修行を目指そうとする意識と奇妙に一致し、しばらくはこれだと思った。クラスに山西英一氏の息子がいて、共に現代思潮社版のトロツキー『わが生涯』を愛読し、ドイツチャーのトロツキー伝に感動した。しかし1965年後半から1966年初めにかけての学費学館闘争において、「調和の幻想」は完全に破綻してしまった。内ゲバが始まったのだ。当時の蓮見氏は有名な行動隊長でもあった。私は訳が分からぬままの学友会代議員という名の一兵卒。体育会系学生の本部封鎖解除を阻止するために動員され、「か

かれー」という彼の号令一下、格闘の最前線に押し出された。結果はあつという間の失神だった（先方には当時短距離のスターであった飯島選手がいたことは覚えている）。またある時は、教育学部の民青との小競り合いでやはり最前線に押し出され、民青から殴られ、わあつと逃げ帰ったら民青と間違えられ革マルからも殴られた。実に惨めな体験であった。共産主義は本当に嫌だと思った。トルストイの『コサック』の中に「人間は精神的に高揚している時ほどエゴイスティックになることはない」という一句を見出し、文字どおり痛く共感した。その後の全共闘運動の高揚をシニカルに見るようになったのはこの言葉の体験によるのだと思う。



佐藤勇先生と孫の可士和さん

3年時に井伊玄太郎先生のゼミ「共産主義の理論と実践の批判的研究」を選び、ゼミ長に任命された。この先生には、一般教養の「社会文化人類学」ですでに接していた。最初の授業の時、先生は、黒板に大きく「マルクス坊や」と書いて、「こんなのは駄目ですよ」と言ったかと思うと、大きな×印でその言葉を消し去った。当時左翼

学生は彼を「イイカゲンタロウ」と揶揄していた。先生の口癖は、本ばかり読んでいては駄目だ。フィールドが大事だというものであった。先生の言葉に半ば共感しつつ、漠とした思想の体系性に憧れていた私は、ここでもちぐはぐな感じを抱いたままであった。今から思えばトクヴィルを先生と一緒にもっと勉強すべきであったと思う。シモーヌ・ヴェーユについてもそうである。

「人間は恋と革命のために生まれてきたのです」という太宰の言葉になぞらえれば、当時その双方において駄目だった私は意気消沈していて、「君は指導力がないねえ」と先生に面罵されることもしばしばであった。しかし、4年時のゼミ旅行の企画は、我ながらよくやったと思っている。私の故郷多治見でのフィールド調査の後、南木曾に勝野金政氏を訪ねたのだ。加藤哲郎氏や藤井一行氏の最近の研究でよく知られているように、氏は収容所群島の生き証人であった。氏の長男春喜君と政経学部の同期であったのが縁で、南木曾町のお宅を訪問し、勝野氏の支払いで妻籠の宿で一泊したのであった。氏の夫人は、早稲田の政治哲学教授であった五来欣造先生のお嬢さんであった。全く偶然のことであるが、井伊先生が学生時代に幼女であった奥さんに会ったことがあり、半世紀以上を経ての再会に興奮されていた。旧家の佇まいを見せる勝野家の囲炉裏を囲んだ語らいの場には、春喜君の姉上(早稲田露文卒)も控えておられた。後年、早稲田で勝野金政に関するシンポジウムが開かれたが、その時の懇親会で司会を務めることになり、春喜君などと再会する事が出来た。

なろうど憧憬

ゼミでは、荒畑寒村や松田道雄の影響の下にナロードニキについて報告した。集中力を失った私によく付き合って下さっていたロシア語の佐藤先生は、私の興味に沿ってコロレンコの『不思議な女』やトゥガン＝バラノフスキーの『過去と現在におけるロシアの工場』をテキストに使って下さった。それだけではない。ゲルツェンの魅力について教えていただき、文学部に学士入学をして卒論を書く際には、レムケ版ゲルツェン全集を貸して下さった。学園紛争中に父を喪った私は、三人の兄たちの寛大さに甘え、文学部西洋史学科に学士入学することが出来た。佐藤先生から山本俊朗先生を紹介されたのだ。山本先生も政経学部から文学部に学士入学をされた経験をもっておられた。大学院に進みたかったが、しかしいつまでも兄たちに甘えるわけにはいかなかった。夜警などで自活の道を求めたが、完全な経済的自立には到らなかった。またもや佐藤先生が助け船を出して下さった。



井伊先生 1997年6月／左はセルゲイ・ガルキン

当時、学園紛争は、高校段階にまで広がっていた。東京港区の私立麻布学園では、紛争を力で抑えるために登場した理事長代行の山内一郎氏が、左翼系の社会科教員を解雇したため、欠員が生じていた。山内氏は日ソ交流協会の理事長でもあり、副理事長を務めておられた佐藤勇先生と縁があったのである。大学院に籍をおいたままこの学園に初めは講師として、4年後には専任として都合27年半もお世話になるとは、夢にも思わなかった。就職した当初、日ソ交流協会からソ連留学に派遣してくれるかもしれないという甘い打算があったことを告白しておかねばならない。しかし、学園紛争はそれどころではない方向へと展開して行った。東大紛争の真似ごとのような学園紛争の当事者たちに私はシニカルに接していた。だがあろうことか、途中で理事長代行山内氏による学園財産2億円余の横領事件が発覚し、紛争の火に油を注ぐ態となった。混乱する学園に嫌気がさして、2年目には冬休み前後、休暇をとって1ヶ月半におよぶヨーロッパ旅行に出かけた。ウィーン留学中の稲野強氏にお世話になった。モスクワ留学中の安井亮平先生からソ連にも足を伸ばすよう誘われたが、不遜にも、短期間の滞在ではソ連という外皮の下に隠されたナロードのロシアを見ることは出来ないと思って断念した。相変わらず観念肥大化の病は癒えていなかったのだと今では後悔している。代行の縁故で就職した麻布ではあったが、生徒も同僚も実に暖かく、学園は徐々に居心地の良い場所となった。専任になっても研究の時間を尊重してくれるところがあった。山本先生のゼミは定例の職員会議と重なってほとんど出席できなかった

が、先生はそれを大目に見てくださった。金子幸彦先生の講義は、小人数で極めて恵まれたものであった。結局12年間も大学院に在籍していたことになる。この間、ロシア史研究会にも参加するようになった。この研究会に参加するつもりだと山本先生に相談した時のことは、忘れがたい。「僕もね、昔は出ていたのですが、何か明日にでも日本に革命が起こるような話ばかりするようになってしまいましたよ。だから今は出ていないのです」と言われたからだ。出てみると多少そういう痕跡はあったが、それほどでもなく、いつも庄野新先生や和田あき子さんの暖かい笑顔に出会えた。

ペレストロイカ

バック旅行でもよい、ソ連に行ってみたいと思うようになったのは、ゴルバチョフの登場による。1987年8月初めてソ連の土を踏んだ。ナホトカ、ハバロフスク、モスクワ、レニングラード、キエフをめぐる二週間の旅であった。あちこちで幼時のイメージを追体験した。ナホトカの水洗トイレはkakaが溢れて流れなかった。シェレメチェヴォ空港で最初に感じたのは何とも言えない異臭であった。チェルノブイリの翌年のキエフは、埃の中に沈んでいた。しかし、なんという生き生きとした国だろうと思った。混沌とした現状が、自分のロシア研究の混沌と見事にマッチしていて、ロシアに病みつきのなってしまう。翌年、またもや佐藤先生のお世話で、モスクワ大学で毎年行なわれていたロシア語教師のための夏季セミナーに参加した。ロシア語教師のためのセミナーという以上、ロシア語を教える必要があると思い、その年の春から麻布

学園で放課後にロシア語を教えることにした。募集してみたら 30 人以上の生徒が集まった。当時ソ連はまさにトレンドイナな国なのであった。大学院で同期であった山内重美さんのコンサート、50 人以上の高校生を連れてのソ連大使館訪問、その時知り合ったレオニード・シェフチューク一等書記官（現札幌総領事）の三度にわたる学園での講演会、図書館での「ロシア＝ソ連特集」と銘打ったブックフェア、その一環としての和田春樹先生の来校などいずれも若い世代の熱気に支えられて実現できた企画ばかりである。しかし 1991 年を境に潮の流れは逆転した。ロシアへの関心は急速に消えていった。シェフチューク氏の来校は 1990 年、1991 年、1992 年の三度であったが、最初の講演会への参加者は 400 人、次が 200 人、ソ連崩壊直後に行なわれた三度目が 100 人である。詳しくは『日露 200 年』（1993 年彩流社刊）所収の「若い世代の意識」の中で触れたのでここでは繰り返さない。

わたくし心を公に

ソ連崩壊後も毎年短期間ロシアを訪れたが、職場における私のエネルギーは、学園百年史の編纂に向かった。この仕事は 1995 年に完了した。その後またロシアに対する関心を学園に吹き込もうと思い始めたのは、ロシアの歌手エカテリーナ・コロボヴァ（カーチャ）との出会いによる。山内重美さんが 1996 年、モスクワ放送に勤務することになり、6 月に新宿で行なわれた歓送会で彼女と出会った。彼女は飛び入りで、ピアノを弾きながら「モスクワ郊外の夕べ」を歌った。今までに聞いたことのない独自の歌い方であった。これまでの印象では「モス



エカテリーナ・コロボヴァ（カーチャ）

クワ郊外の夕べ」は情緒的でセンチメンタルなものであったが、彼女の歌の調子は、もっと激しく切ないものであった。「おうこれがロシアだ」と思った。7 月にソロヴィヨーフ駐日ロシア大使の歓送会が霞ヶ関ビルであり、その帰り道に銀座に寄り、彼女が歌っているロシア・クラブ「マヤ・ローザ」に行った。経営者は兵頭ニーナさんで、かのアラ・プガチョワの友達である。加藤登紀子が「100 万本のバラ」を持ち歌とするようになったのは、彼女の仲介の労によるという。そこで聴いたカーチャの歌の音域の広さと情感の豊かさにはすっかり惚れ込んでしまった。彼女の一人息子セルゲイともども家族付き合いが始まり、色々彼女と彼女の歌を聴く機会に恵まれた。内戦期に白軍兵士によって歌われた（とあるロシア人友人は説明してくれた）「光り輝け、わが星よ Gari-gari, moya zvezda」とか、オストロフスキーの『持参金のない娘』を題材とした 80 年代半ばのソ連映画「残酷なロマンス Zhestokij Romans」の主題歌の一つ「最後に言うておくわ A napolnedok ya skazhu」を聴いた時には底深いエネルギーをもった悲しみを感じ、酔いも手伝っていたのかも知れないが、思わず落涙した。翌

1997年夏、モスクワの居酒屋でジプシーの歌と踊りを楽しむ機会があり、見事な声量をもった歌姫に「ガリ・ガリ、マヤ・ズヴェズダ」をリクエストした。リクエスト代2万5千ルーブリを請求され、逞しい悲しみだという印象を受けた。モスクワの後、早稲田大学のサバチカルでワルシャワに滞在中の井内敏夫氏を訪ねた。ドイツ軍に完全に破壊された旧市街は見事に復興され、観光客がリーネクと呼ばれる広場に溢れていた。目立ったのは出稼ぎのロシア人辻楽士であった。ギターを奏でながら悲しげにロシアの歌を歌っている青年には誰も足を止めない。彼に「ガリ・ガリ、マヤ・ズヴェズダ」をリクエストした。広場の片隅で聴衆は私一人。彼は「この歌は自信がないけど…」と言って歌い始めた。なるほど心許ない悲しみという印象であった。カーチャの歌を生徒たちに是非聞かせたいと思った。彼女の歌唱力はValentina Ponomarevaに比肩しうと思う。

1997年の秋、カーチャのコンサートを麻布で開くことにした。とは言っても、学校の正式行事ではないからどこにも予算はない。同僚の一人は「わたくし心の公（おおやけ）化だな」と揶揄しながら、熱心に準備を手伝ってくれた。同僚一人一人にカンパを募っただけではない。ロシア語講座の生徒、卒業生、父兄も協力してくれた。コンサートは大成功であった。観客400人余、カンパ約25万円が集まった。このコンサートを契機に彼女の息子セルゲイの「ロシア語会話教室」とカーチャの「歌の教室」が定期的に麻布学園で開かれるよう

になった。それは私が麻布を辞めた後もしばらく続いた。

おろしゃ会

10年前に愛知県立大学に赴任し、ロシア語を履修している学生と「おろしゃ会」を作った。次のサイトにホームページがあり、創刊号から最新の14号に至るまでの会報が掲載されているので、是非見て欲しい

(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~kshiro/orosia.html>)。ロシアに対する関心を教壇からいくら喚起しても空しいというのが、この会を発足させた動機である。私のロシアとの関わりを恥ずかしげもなく長々と綴って来たのは、「滅私奉公」の時代は確実に終わったのだと言いたいがためである。

「滅私奉公」の時代は第二次大戦とともに終わったのではない。自分自身を振り返って分かるのだが、社会主義の理念が戦後も長い間「滅私奉公」を支えてきたのだ。我々の世代までは、大義や理念や体系性を、換言するならば、Grand Theory を追い求めてきたのである。しかし、ペレストロイカの失敗とソ連崩壊は「滅私奉公」に完全に終止符を打った。「わたくし」にこだわり、「いやし」を求めるイヤシイ時代となった。こういう時代に旧来の「ロシア」が魅力をもつことはありえない。ロシア語を選択したとしても、「ロシア」に憧れたりするわけではない。教壇から語られる「ロシア」は、学生たちにとって教員のセンスのない「様々なる衣装（ママ）」の一つに過ぎないのである。厄介ではあるが彼らの「わたくし心」と触れ合わないと授業は出来ない。ロシアに対する関心が低迷し、ロシア語やロシア関係講座の学生数が少ない今こそチ

チャンスである。学生一人一人と接する余裕に恵まれたと解釈すべきであろう。ロシア人の先生の授業についてゆけず、ロシア語を放棄しようとした男子学生がいる。電話で「なぜ出てこない」と言う。「なぜと言われましても」と口籠もる。とにかく一度会うことにした。「何をやったらよいのか分からない、気力が起きない」のだそうだ。唐突だが、彼にリハチョーフの話をした。『善と美に関する手紙』の一つをコピーして彼に渡した。予習をやったら来いと言って。一週間後彼は現れた。単語を調べて真っ黒になったコピーを持って。折悪く教授会の始まる直前だった。30分だけやろうということになった。相手は必死になって調べてきてある、何が分からないかはっきりしている。こういう学生を相手だったら30分でも実に充実した授業が出来るということが分かった。これも「おろしや会」の活動だと思っている。

私と時を同じくして呉智英も名古屋の住人になった。親の介護のためである。「おろしや会」で講演もしてくれた。また「比較文化」という科目を集中講義で担当してくれてもいる。会って話しをする機会が増えた。よく話題となるのは、「最近の若者

たちは、俺達に比べると大人に遊んでもらっていないな」ということだ。前任校麻布学園の創立者・江原素六は「青年の友たるは余の素志である」と言って、名士の会合をキャンセルしては若者たちと付き合ったという。今まで書いてきたように、私も随分と色々な先生たちに遊んでいただいた。「おろしや会」を通して若者の友となればよいと思っている。この点では、「ロシア研究」の非常勤講師をお願いしている田邊三千広氏から随分と刺激を受けている。

名古屋にいても、日常的に多様なロシア人と出会う。学者・芸術家・ビジネスマンといった人々だけではない。日本人と結婚して名古屋やその近辺に住んで平凡な市民生活を営んでいる人も多い。ロシアは、「わたくし心」として着実に我々の隣人となっている。「おろしや会」はそういう時代にロシアを学ぼうとする会である。「隣人について無知無関心ではどうしようもない」ということだけを、唯一のスローガンとして。

(注：本稿は、成文社のホームページ <http://www.seibunsha.net/essay/essay26.html> にリレーエッセイとして掲載したものを基に加筆修正を行った。)

著者プロフィール

加藤史朗 (KATO Shiro) 国際文化研究科・外国語学部 (学部共通) 教授、近代ロシア社会思想史

■略歴：10年前に、県大に赴任するまで、東京の麻布中学・高校で世界史の教員をしておりました。生まれが多治見市で、東海中学・高校の出身ですから、里心がついたんだろうと言われました。

■これまでの研究：19世紀のロシアの思想家アレクサンドル・ゲルツェンについて研究してきました。ナロードニキ主義の先駆者と言われるゲルツェンですが、それは彼の思想をロシア革命

運動との関連で狭めた捉え方です。彼の真骨頂はヘーゲルやマルクスの歴史決定論的な考えを批判し、自由な歴史的思索を求めたことにあるのです。ちなみにペレストロイカとかグラスノスチという用語を定着させたのもゲルツェンです。近著は以下。

- ・「18世紀ロシアの専制政治をめぐる若干の考察」『ロシア史研究』第66号（2000）
- ・「ゲルツェンにおける18世紀の遺産—ピョートル1世とフランス革命—その1」愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）第34号（2002）
- ・「近代歴史学生成期における「ロシアとヨーロッパ」」『ロシア思想史研究』第1号（2004）
- ・「ゲルツェンにおける18世紀の遺産—ピョートル1世とフランス革命—その2」愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）第38号（2006）

■これからの研究：ゲルツェンの歴史意識や歴史感覚を考察する内に、そこに18世紀の歴史と歴史学の遺産が凝集されていることに気づきました。特にエカテリーナ二世期の歴史論争に注目しております。この観点から最近のプーチンによる歴史教育への介入についても関心をもっています。歴史に対する権力の介入は、むしろ対岸の火事ではありません。ゲルツェンの主著の一つに「向こう岸から」と題するものがありますが、「向こう岸から」の声に耳を傾けることこそ学問の基本です。

■「共生」について：多文化共生という言葉は、「歴史」にも適用されるべきだと考えています。横軸で多文化共生を考えるだけでなく、縦軸でも考えたいと思います。つまり、歴史的過去は異文化でありながら、現在に共生しているという観点が必要だと思うからです。目の前にいる学生たちは、一種の異文化であり、そこで教育を考えるなら、多文化共生を目指すしかありません。そういう意味で、ロシア研究のサークル「おろしゃ会」は有用であると密かに自負しております。今年の秋に、会の主催で「日本とロシア—若い世代へ—」というシンポジウムを開く予定です。



シベリア鉄道ロシア号の前で県立大学学生と(2004年夏ウラヂヴォストーク)